

うになるのである。然し今は彼等の靈はまだ純粹な靈であつて、永劫に着用すべき靈體を「まだ着す」に居るものである。然し、兎に角此の如き光榮ある福祉が、他の福祉の外に與へらるゝ見込があるのであつて、彼等は常に之に達せん日を待つて居るのである。

彼等には完全なる安心がある、而して彼等は亦完全なる奉仕を爲すの日を待つて居る。彼等には永久に勞苦や不安はない、又疲勞倦怠や苦痛は無い。而して基督との交りに何の隔ても邪魔も無い如く、彼等相互の間にも左様のことは無いのである。彼等の關係には最早誤解などは無い、感情の隔離もない、罪過の爲めに心が咎めるやうな事もない、後悔の必要もなければ、痛恨の心に起ることも無い。斯様のものは下界では何んな善人にでも有り勝ちのことであるが、天上界では全くそんな事は無い。彼等は「神の玉座の前に疵なき者」である。何となれば彼等は基督のすがたをかたどつて居るものである。

つて、基督は過のない御方であるが爲めである。而して前世の罪業は一切記憶より完全に取り去られて、全で前世に過の無かつたやうに見える程である。

扱ても是等の「天上界の聖徒」が、神聖無垢の身となり、未だ墮獄せざる天使と同様の聖き身となつて居るといふ事や、或は彼等が一度は現世の罪人であつたといふ證據としては、何も残つて居ないで、唯其の基督にかたどつて居るといふ異彩を放ち、基督の御すがたの光明が彼等に一きは目立って見える點だけで、彼等の社會での目じるしになつて居て、それが基督の死に依り救はれし者としての特徴とせられて居るといふやうな事などは、是れ實に驚嘆すべき思想ではないか。然し彼等は絶對的に人間を一變する神力の殊恩に浴し得たものであるといふ證據として、彼等の神聖の程度が天使の神聖よりも一層神聖なることを言ふのは當つて居るが、天使の神聖よりも不完全であるか



ら、此の殊恩に浴したのだと言ふのは間違つて居る。

故に彼等は天使の基督に近きよりも猶ほ近い關係を有して居るのである。黙示録にある通り、基督は、「勝を得る者には、我と偕に我が寶座に坐することを許さん」と言ひ給うたのである。而して此の寶座は、即ち神威と榮光との寶座たると共に、また審判の寶座である。パウロも「聖徒は世をさばく可し」といひ、「吾曹が天使をさばくに至る可きを知らざるか」と言つて居る。彼等聖徒は即ち審判の寶座に坐して、基督の輔官となり、基督と同じく忠實に審判の務を爲すものといふ神の御信任を蒙る者である。さすれば其の思想、其の感情、良心及び辨別等が、如何ばかり基督と似かよつて居ることであらう。蓋し驚嘆に値ひす可きものである。

斯く陳べ來つて見ると、全く虚偽のやうである。清國人で基督敎信者となつて、聖書の翻譯を手傳つて居たものがあつたが、黙示録第三章二十一節に

至つて、筆を投じ、有りがた涙をこぼして「嗚呼勿體なし勿體なし、寧ろ譯を更へて「わが足に口づけするを許さん」と書き置く可し」と嘆じた事があつたさうだが、これは左もある可き事である。右の節を讀むと「わが寶座に吾と共に坐することを許さん」とある。而かもこれは、勝を得るものには誰にでも許すと基督御自身の仰しやつた所の御言葉だと書いてある。

斯かる言葉は、基督さへ使用するに不似合なほど大袈裟な言葉であらうか。否、かの『贖身救濟』の一語の意義を十分に會得さへすれば、救はれし心靈が完全なものとなるといふ言葉は、少しも針小棒大なところは無いわけである。何となれば救ひとは常に墮罪せざりし人間、又は墮獄せざりし天使の、幸福にして神聖なる境涯に心靈を持つて行くことのみを謂ひではなく、亦絶對的に完全にして且つ消滅することなき基督の神聖と幸福との境涯に至らしめることを謂ふものだからである。



故に喪者は須らく此の事を思ふ可きである。——即ち主に在りて死せしものは、今や此上なき聖者となりたるばかりでなく、又所謂「天上界の聖徒」となりたるものであつて、神の榮光に照らされても、少しも耻づる所なきほどに純潔無垢の身となり、「神の榮光の前に無垢の身を以てあらはれ、無限の喜びをなし」て居るものであつて、——而かも此の喜びは、死者一人のものでなく、同時に基督の喜びである。即ち基督は死者等の爲めに、彼等を天國に伴れ來らん爲めに身を殺し、今斯く己の如く神聖なる彼等をわが側に侍らすを得て、昔十字架にかゝつた際の人類に對する愛情が今酬いられたと喜び給ふものである。

此の事を思つたら、人は彼等死者を此の世に呼び返したくは無いやうに成るであらう。

Only "Good-night!" beloved, not "Farewell!"

A little while and all His saints shall dwell  
In hallowed union, indivisible;

"Good-night!"

Sarah Doudney.



## 二十 永劫の住家

救はれし神の子等は、何れ如何なる境遇に遭つても、最終の慰安が有る。即ち罪や汚れの無き、永久易はらぬ住家に行けるといふ慰めが有る。抑も此の住家といふのは那邊にあるか。又其處に如何様なる生活を營むわけであるか。斯様の問題は未だ十分に解答が出来ぬ。何となれば吾人は目に訴ふるも耳を以てするも、將た胸に手を當て、考へても、神が已を愛するもの、爲めに備へ置き給へるもの、如何なるものなるかを知ることは出来ないからである。然し吾人が時々極樂の福祉は如何なるものなるかと臆測しても判然と分らぬ事が、聖書を見るとちやんと明瞭に出て居る。

天福を受けて死んだ人々の靈魂が今何處に居るか。其れは吾人にも分らぬ、唯「基督と偕に在る」ことしか分らぬが、然し基督一旦榮光を以てあらはれ給

ふときは、彼等は靈體を着するに至るものであつて、其の時如何なる處に彼等は居ることとなるかといふ事については、大に暗示が與へられてある。此の時節が到來して、始めて彼等は完全に其の永劫の住家に行く資格が出来るものであつて、又此の時始めて所謂「住家」なるものも、彼等の爲めに備へらるる次第である。而して聖書には明白に言つてあることだが、其の住家なるものは、即ち此地球上である。但し其れは地球が最終の審判の火で、罪の跡方の無いやうに綺麗に焼きつくされて了つてからの話である。そして「正義の宿る新天地が出来」わけである。彼得後書第三章に彼得が古の世は水に蔽はれて滅び、今の世は火に焚かれて滅ぶ可しといふやうな比較を擧げて居るのは、正に上述の事を指せるものであらう。未來の住家は靈的のものであるとは云ひ條、また物質的のものであるには相違ない。新天地と云つても、有形の天地には違ひなからう。畢竟、造物主の御手を離れた時の出來立ての



清い天地のことを謂ふのであらう。而かも其の清いと云ふ意味は、再び罪の潰れが此處に入り来る憂はあるが、今暫くは純潔であると云ふが如き意味ではない。永久に不易に純潔なるの謂ひである。——即ち其の新天地の清きことは、少しも汚れる恐れのないやうな清さであつて、猶ほ之に住むものが再び墮罪するの恐れなきと一般である。

神の救済事業は、斯くてこそ神わざらしく終りを完うしたと謂へるものである。——即ち先づ靈魂の救済に始まり、次に肉體の救ひに央ばし、最後に天地そのもの、救ひに終つて居るのである。此の現在の世の中は、久しい間サタンの暴威を逞しうする所となつて居た。其處が基督の永遠の勝利の舞臺とならうとするのである。又此の世は不正不義の跋扈した世の中である。其處がこれから普遍の正義の輝きわたる所とならうとするのである。又此の地上は神の聖徒が苦患を見且つ涙を流した所である。其處に將來悲しみの記憶

が消え失せ、涙は永久に拭ひ去られやうと云ふのである。之を思つたら、誰とて心の満足を感せぬものは有るまい。

試みに想へ、現在このまゝの世界にしたところで、唯の一週間でも若し神に背く心を持つものなき、愛神の人のみの世と一變したりとせば如何。軍も無く、殘酷な事も無く、嫉妬もなく、懊惱もなく、其他一切の不吉不正な事は無い世の中と成つたら如何なであらう。又試みに想へ、其の一週間が一年とつゞき、一年が百年と延び、百年が永劫となつたら如何であらう。これよりも美なる福祉の境涯が、またと有るであらうか。況んや其れに住へるもの、皆大なる新らしき榮光を與へられ、『靈體』の變通自在力を與へられて、而かも其の靈體は人の子(基督)の靈體にかたどられてあるといふに至つては、吾人の福祉も此に至つて完全極まりなきものと謂つて差支は有るまい。パウロが「彼は萬物を己に服はせ得る能に由りて、我儕が卑しき體を化て、



其の榮光の體に象らしむべし』と言ッて居るので見ると、パウロは、吾人が基督の榮光の體の如何なるものなるかを心得て居るものと想像して居たのである。之を讀んで吾人が直ぐに想ひ起すのは、基督が墓より甦りて後四十年間も、現在此の地上を歩いて居られた時の肉體のことである。之を想像すると、恰も基督の聖徒等が天にあげられて、再び肉體を取った時の様子が、模範的に其の中にあらはれて居るやうな氣がする。蓋し其の肉體は、非常に力の充實した肉體であつた。外界からも又は内部の疲勞倦怠からも、障礙が生ずるやうな事は少しも無い所の肉體であつた。石の壁も隔てを爲すこと能はず地球の引力も止めることの出来ないやうな肉體、種々の形を装ツたり、不意に姿を顯はしたり、又は身をかくしたりする事が、意のままに出来るやうな肉體であつた。又此の如き肉體は、基督が常に『舊のまゝの基督』であつて、而かも舊知のものが見忘れて居るほどに變ッて居給うたとあるが如く、爾く

不思議な肉體であつた。基督の肉體は舊の如くであつたのだが、疑を懐くものは、其の眞に基督なるかを確めん爲め、十字架の釘の痕ある御手を示されんことを基督に求めたほど、少くも其れほどに變ッて居給うたのである。基督の取り給うた肉體は、亦極めて美しい御すがたであつた。生前には種々な悲しみや苦しみがあつて、常に年老て御見かけした御顔も、死後の御靈顔を見ると少しも左様のあとがなかつた。其の御からだには、言ふ可からざる榮光が輝いて居た。其の爲めにこれまで彼に馴々しく話しかけて居たものすら、憚ッて近寄る事が出来なかつたのである。即ち舊のやうに現世の友人として親しく打語ふことをせず、主よ〜と言ッて崇め奉ツたのである。基督は斯くの如くして四十年間何處に住むとも知れず。現世に生きて居たまうたものである。故に基督の御顔が見える事を『御すがたを顯はし給ふ』と稱し、基督は常は見られぬ御方であつて、人の形を取ツて始めて人間の目に見



える御方であると世に信せられて居たのである。されば基督の往來は、宛然幽靈の如くであつた、而かも基督は其の實、幽靈ではなかつた。何となれば基督自ら「われに觸りて見よ、靈は斯く肉と骨とを有せざるなり」と仰しやつたからである。

故に「如何にして死者は天にあげられ、又如何なる體となつて現世に再來す可きか」といふ問題に對しては、右の四十年間の基督の靈體を見て知る可しと言ひ、又「基督あらはれ給ふときは、吾人も亦其の如くなる可し」と言ふとも、恐らく言ひ過ぎではあるまい。此の時に方つては、今日のやうな能力の制限や無能などのことが無く、今日の吾人の知らざる肉體力が出來て、今の身に叶はぬ奉仕もすることが出來る身と成り、森羅萬象に對して無限の支配力を有し、今では隠れて居る不可思議をも顯はし得る身となり、又恐らく他世界とも交通が出來て、或はそこへ神の御使者として遣はさるゝことゝ成

るやうな事もあらうと云ふ、——さういふ身にも成れるのである。

然し其んな事はどう成らうとも、少くとも新らしい世界は極々神聖なところたると共に、亦極々幸福なところであり、現世の神聖なる信仰上の交はりか、一層廣く行はるゝ所であらう。又此の新天地に於ては、古往今來、聖者、即ち「人の數ふる能はざる巨數の」聖者が互に名乗り合ひ、互に此の新天地に入ることの出來た有り難さを語り合ふことであらう。又此の世界にありては、一切の智的能力、一切の社會的感情、及び一切の純潔なる愛情が、極點まで發展し行き、神を知ること日に加はり、神を愛すること刻々増して、是れまでに知らなかつた程、神にも人にも喜んで奉仕することであらう。而して是等の事は皆、數百萬年間も神の愛に浴し、罪なくして神に仕へ奉りし天使等の助力に依りて行はるゝことであらう。是等の事を想へば、此上なき喜びを吾人は前途に認めざるを得ない。特に現世で永い間、生別死別の悲し



みや、寂しさや、病羸の爲めに惱みわづらつて居た人々に取っては、是等の希望を前途に認めるといふ事は如何ばかりの慰安であるか知れぬ。凡そ神の御慰めは數々あれど、此の御慰めは、最後且つ最大のものである。而して其の切り上げにエス・キリストの『榮光を以ての來臨』といふ有りがたい事が起るのである。これは喜びの絶頂である。此の大歡喜は、『基督の來臨』の時を待つて吾人に與へらるゝものであるが、其れを樂しみに待つことも亦是れ『有り難き希望』ではないか。而して其れを樂しみに待つといふことが、惱めるもの、弱きものゝ一大慰藉となるのである。彼等にも斯ほどに大なる慰藉が與へらるゝ事かと思へば、是れ亦驚く可き事である。

エスは『爾曹の心をわづらはす勿れ』と言はれた。是れ何故であるか？ 他なし、汝等は死によりて我のあとに従ひ、死によりて吾等相偕に在ることゝなるべければなりと言はれたのか？ 否々、さうでは無かつた。『若し往きて我

爾曹の爲に所を備へなば、又來りて爾曹を吾に納べし』と約翰傳に言つてある。又天使等は『なんぢ等ガリラヤ人よ、汝等何とて天を仰ぎて立てるや、此のエスこそ……』……エスこそ何と言つたか？ やがて死によりて悲しみより汝等を引離し給はんと言つたか？ 否々、『爾曹を離れて天に擧げられし此のイエスは、爾曹が彼の天に昇るを見たる其の如く亦來らん』と言つたと使徒行傳に見えてある。『主は號令と使長の聲と神の籟を以て自ら天より降らん。其の時キリストに在りて死にし者さきに甦へり、後に活き存る、我儕かれらと偕に雲に携へられ、空中に於て主と遇ふべし。斯くて我儕いつまでも主と偕に居らん。是故に此等の言を以て互に慰むべし』と、パウロは當時の悲しみ惱める者どもに書き送つて居るが、斯くの如き慰藉は、今も昔も變ることなく存じて居る。又番に死して主の許に往くことのみならず、主が榮光を以て吾人に來臨し給ふと云ふことも亦大なる慰藉、又希望である。昔は『主



のあらはれ給ふことを喜び』『神の子の天より来るを待つ』人を以て基督教信者としてあつた。借問す、今日の信徒大抵斯くの如しであるか。斯く主の躬に來臨し給ふことを希望して樂しみに待つて居るといふことは、今日も教會の中に見出し得らるゝであらうか。之を思へば、吾人も大に慚然たるものがある。斯くの如き有りがたい希望を、絶えず胸中に友として居ることは、熱心なる信仰を長じ、悲哀と失望を抑へる上に於て必要なることである。若し夫れ『われまた汝等に會ふべし。其の時汝等の心よこばん。而して汝等のよるこびは、何人も之を奪ふことなかるべし』といふ情ある御言葉に耳を傾けて、尙一層喜んで之に従ふやうになれば、悲しみや嘆息は、速に消え失せることであらうと思はれる。さほど深く吾人を愛し給ふ基督が『必ず速に來るべし』と宣ふからには、基督を愛し奉るものが『主よ、夫れ然るか。さらば來り給へ、アーメン』と言ふも亦尤もではないか。

The whole creation groans

And waits to hear that Voice

That shall restore her comeliness,

And make her wastes rejoice.

Come, Lord, and wipe away

The curse, the sin, the stein;

And make this blighted world of ours

Thine own fair world again.

Come then, Lord Jesus, Come!

H. Bonar.

逆境の慰安終



明治四十四年十二月二十一日發行

明治四十四年十二月二十日發行

逆境の慰安

定價金四拾錢

著者 高橋正熊

發行者 山縣操

印刷者 荻原勝次郎

印刷所 博文館印刷所



發行所

東京北豐島郡巢鴨町上駒込二十番地  
電話 下谷四百三十八番

内外出版協會

(振替貯金口座東京三百五十五番)

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地



IMITATION OF CHRIST

章四十百一卷四全

譯善日  
述一高

# 基督の模倣

四卷全一册  
定價金七拾錢  
郵稅六錢

福音新報の批評 トマス・ア・ケムピスの『基督の模倣』は、聖書に次ぎて今日も世界の基督教徒に愛讀せられて居る書なり。日本にもこれまで同書の翻譯せられたるもの二つありき。而して松田承久氏の『世範』と名付けられたるもの廣く行はれたり。此度また日高氏の譯著新に世に出たり。之を見るに『世範』よりは種々の點に於て進歩せりと云ふを躊躇せず。譯者が此の勞多き事業を斯の如く成功されたるを多とせざるを得ず。日本の基督教徒は、信仰を養ひ徳を立つるの好伴侶を與へられたりと謂ふべし。

新入の批評 トマス・ア・ケムピスの此書が、あれ程有名な書でありながら、今まで良い譯書が出なかつたのは寧ろ不思議である。それを今度日高氏が英譯書より重譯して公にされた事は、我々の感謝する所である。文章は雄健莊重な原文の面影を遺憾なく傳へて居る。邦語譯の世界的宗教書を得たことを我々は喜ぶ。

東京 東橋口 鴨居 上野 駒込 二丁目 五番 地番 五十五 内 外 出版 協 會 元 版 出

松本 趙 編 著

# 基督

再 版  
定價金壹圓貳拾錢  
郵稅十二錢

護教批評

世界三聖傳の一として『基督』出でぬ。著者は誰ぞ。處にシエンキ井ツチ作『何處に往く』を譯し文名を知られたる松本氏なり。松本氏は窮冠にして信仰の門に入り、諸先輩に私淑して心靈上修むる所淺からず。ます、基督教の堂奥に達しんと欲して、潛心基督の生涯を研究し、其の結果を發表せるもの本書即ち是れなり。著者の如きは洵に基督を傳ふるに適せりと謂ふべし。著者は重にも材料をデイン・フアラアの『基督傳』及びデビッド・スミスの『基督在世の時』に採り、簡潔なる筆を以て趣味深く記述せり。我が邦未だ完全の基督傳あらず。竹越氏の『基督の傳記』海老名氏の『基督傳』ストーカー、ニコル、プロクター、スルナン等の譯書等稍々見るに足るものありと雖も、繁簡宜しきを得て中正不偏なるもの、少きを憾みとす。此の時に當り本書の出版ありしは、基督教文學の爲めに慶賀せざるを得ず。惟ふに基督傳の研究は、直ちに基督教の中心に接觸し、堅實なる信仰を樹立するの基たるべし。吾人は此の良書を世に推薦するに躊躇せざるなり。

西脇玉峯編著

大屋徳城編著

# 孔子 迦子

(再) 定價金壹圓  
郵稅十二錢  
(再) 定價金壹圓貳拾錢  
郵稅十二錢

東京 東橋口 鴨居 上野 駒込 二丁目 五番 地番 五十五 内 外 出版 協 會 元 版 出



第三版

# フランダーズの犬

日高柿軒・著原ダイウ

萬朝報批評

本書は數月前伊太利に窮死し、僅かに其の一忠婢と數頭の犬猫とによりて哀悼の誠を致されたる薄倅不遇の閨秀作家ウイダ(本名ルイス・デ・ラ・レミイ)女史が一代の傑作にして現下歐米の各新聞雜誌は、筆を揃へて之を激賞し、世界最良圖書百卷の一に數ふべきを云ふものあり。實に世の貧しき者弱き者に對して憐れられたる作者の同情熱誠は、滾々として紙上に漲ぐ、殊に忠犬が孱弱き主人公を慕ひ、自ら安樂を捨て、死地に就くのあたりは、試に五六の少年少女をして讀ましめたるに、よく一人の泣かざるものあることなし。譯文また流麗暢達。動物愛護の情を養はしむる上に多大の貢獻あるべきを信じて疑はず。是れひとり少年少女の健全なる家庭讀本として推薦すべきのみならず、又贈物用として甚だ妙なる可し。

定價金貳拾五錢・郵稅四錢

版元 內外出版協會 東京東區上野三丁目三番地 電話三五五番

日高善一譯

## ヴァン・ダイク短篇集

定價金四拾錢 郵稅四錢

- 一 目次
- 二 泉
- 三 物見の岩
- 四 遊藝の博士
- 五 土塊
- 六 口止
- 七 降誕節飾樹の由來

ヘンリー・ヴァン・ダイク博士は、米國プリンストン大學の教授にして英文學界の泰斗たり。兼て又英語國民の間に最も欽仰せらるゝ創作界の大家なり。其の何れの作を探りて之を讀むも、全幅に漲る敬虔の情緒と、鋭敏なる良心と、豊富なる創作力とは、讀者をして思はざるうちに美はしき感化を被らしめ、高尚なる趣味を養はしむるに足るべし。本書收むる所は、其の數多き短篇の中より、殊に面白く、暗示に富める六篇を譯出したるなり。譯者は佳譯「フランダーズの犬」等を以て夙に其の伎倆を認められたる日高柿軒氏なり。

版元 內外出版協會 東京東區上野三丁目三番地 電話三五五番







The Three Homes

# 小説 三家庭

好評再版 スロク綴美本  
定價金壹圓 \* 郵稅拾貳錢

同志海老澤氏、有名なる英書『三家庭』の翻譯を公にせらる、行文流暢にして章句簡淨、よく原文の妙趣を傳へて而も邦人の理解に易からしめたる叙述の巧なる、眞に一讀巻を捨つるに忍びざらむ實に是れ我國現時の家庭に推獎禁する能はざる好文なり。余は日本教育の爲に此書の廣く日本家庭の間に行はれんことを切に祈る。

▲原田同志社長序文の一節

純良なる品性を養成し高潔なる情操を鼓吹する本の如きは、誠に家庭小説の上乗なるものと謂ふ可し。予は原書が英米の多くの家庭に珍重せられんことを切望して已まざる者なり。

## ▲新渡戸博士序文の一節

博士 フアラ 原 著  
海老澤 亮 譯  
新渡戸 稻造 序  
同志社々長 原 田 助 序  
神學博士 ギユリツキ 序  
法學博士 農學博士 新渡戸 稻造 序  
同志社々長 原 田 助 序  
神學博士 ギユリツキ 序

版元 東京 芝罘 上野 二丁目 十二番地 内出外版協會

著原ントス一サ  
譯 雨 紅 川 碧

# 小説 少年僧正

スロク綴美本 定價金壹圓 郵稅八錢

「報知新聞」曰く トードと云ふ不良少年が 慈愛に富めるブルックス 僧正より温かき一言を與へられたるが動機となりて 從來の素行を悔改して新生涯に入り、漸次其の身を 勞役して弱者を救ひ憐れみ、殊にトードの犯罪の爲 め行衛不明となり遂に墮落の淵に陥れる少年を救ひ 出し、共に益々光輝ある愛の生涯を送るといふ感化 小説なるが、此間に配するに可憐にして敬虔の念 深き少女、愛子の墮落を嘆く母、人の愛を嫉む書記、 慈愛に富む貴夫人、小學校教師等を以てしたる外、電 車の運轉手車掌の同盟罷業の活劇などありて結構 非常に面白きが上に譯文亦流麗にして 此種の物に免れ難き晦澁にしてバタ臭き所なければ 何等の苦痛なく愉快に讀ましむ。吾人の如きは 一讀巻を閉づるに忍びず、二三讀を重ね、 多大の教訓を受け、第二の『噫無情』を讀 むの感を起さしめたり。實に近來になき 良書といふべく、譯者の勞を謝すると共に汎く江 湖に推獎するものなり。

版元 東京 芝罘 上野 二丁目 十二番地 内出外版協會



原正男 日曜學校御伽草紙

定價金廿五錢 郵稅四錢

日曜學校及び基督教を奉ずる男女學校に附屬する各種初等學校に於て、修身訓話を授くる際の際の用書として、又生徒に與ふる賞品として、最も恰適なる書が出来ました。趣味あり教訓あるお伽話二十五篇、何れも材を事實に取りて基督の訓言に副ふ所あり、而も少年少女に十分なる感興を起さしむるに足るのであります。茲にまた之を一般家庭に備へてお子供衆の讀み物として宜しいこれを讀む少年少女諸君の内から、三人でも五人でも、善良な人となつて眞面目に正しく世渡りしやうと志す人が出来れば我が願足る、とは譯者の言であります。

- 次 目
- ▲日光の塚話 ▲食食の蛇 ▲復活の話 ▲船長の話 ▲雨乞燈籠守
  - ▲鷲鷲の話 ▲やどかり蟹 ▲馬と犬の教訓 ▲小さき燈籠守
  - ▲知更鳥の巢 ▲煙突の上の人 ▲音樂と小動物 ▲勤勉なる青年 ▲迷へる羊
  - ▲感心な少女 ▲雄船と犬 ▲鐘乳石洞に於ける ▲習慣の力 ▲クリスマスのお話
  - ▲搖籃の小猫 ▲奇妙な家 ▲眞珠採り ▲卵を賣る少女 ▲他人の危き時

元版 東管貯金 東京 町東 上京 三三 五十五番 内版協會

日曜文庫 第一編

母のゆくへ

百島 操譯

定價金拾錢 郵稅四錢

日本の少年石童丸が、父を尋れて高野山へ登つたのは昔の話、この少年は行くへの知れぬ母を尋れて、遙々外國へ渡つたのである。

『母のゆくへ』は伊太利の文豪アマチススの作であつて、有名な Quore 中の最傑作最長篇である。伊太利の田舎に育つた十三歳の少年が、南亞米利加へ出稼ぎに往つて音信の絶えた母を慕ひ、雲や濤、路遙かなる外國へ行方索めて往く話。長い船旅の後、目的地へ着いて見れば母は在らず、それからそれへと尋ねて往けど、いつも母は遠方へ移住したあとで、其のうちに旅費は無くなる、いろ／＼の難儀に出逢ふ、その憐れさ、その艱苦、讀んで思はず泣かされる。丁度活動寫眞でも見て居るやうで、後はどうなるか／＼と讀者に案じさせる。然し神は孝心篤き少年に恵を垂れて、終に臨終の間際と見えた母に會はせる、其の歡喜で母は生きかへるといふ大團圓。尚ほ附録の短篇數種、『勇ましき少年』、『親の病氣』、『難破船』、『子供心』等で何れも面白からぬは無い。

元版出 東管貯金 東京 町東 上京 三三 五十五番 内版協會



# 書著大五スルイマス

本讀好の養涵性徳▲訓教大の實着健穩▲  
力動原の化感士名▲範模活の營自立獨▲

|            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| <b>職分論</b> | <b>品性論</b> | <b>勤儉論</b> | <b>自助論</b> | <b>勞働論</b> |
|------------|------------|------------|------------|------------|

|                   |                   |                   |                   |                          |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------------|
| 金壹圓五拾錢<br>小包郵稅拾貳錢 | 金壹圓五拾錢<br>小包郵稅拾貳錢 | 金壹圓貳拾錢<br>小包郵稅拾貳錢 | 金壹圓五拾錢<br>小包郵稅拾貳錢 | 郵金上<br>稅五卷<br>六拾發<br>銀錢行 |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------------|

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 (番五五三京東座口金貯替振) 元版

## 庫文俗通

## 編譯泉冷島百

(編十第)

# 子公小

上中流社會の家庭に廣く讀まれ、少年少女諸子の世界に善  
良なる感化を與へつゝある本叢書也、此の「小公子」でいよいよ  
第十編に達しました。これは彼の有名なる良小説「リツトル  
ロード、フオントルロイ」の縮譯であります。故若松女史の  
「小公子」は、いかにも名譯でありますが、家庭の讀み物、少  
年少女諸子の讀み物としては、長い原作を巧みに縮めて、而  
かも極めて面白く解り易く出來て居る本書の方が適當であら  
うと信じます。  
(定價金貳拾錢 郵稅四錢)

- (第一編) **天路歷程** BUNYAN'S PILGRIM'S PROGRESS
  - (第二編) **奴隸** STOWES UNCLE TOM'S CABIN
  - (第三編) **聖書物語** THE BIBLE STORIES
  - (第四編) **赤靴物語** ANDERSEN'S FAIRY TALES
  - (第五編) **二人巡禮** ANDERSEN'S FAIRY TALES
  - (第六編) **ロビンソン** ROBINSON CRUSOE
  - (第七編) **イソップ物語** AESOP'S FABLES
  - (第八編) **シェークスピア物語** FALES FROM SHAKESPEARE
  - (第九編) **グリムお伽噺** GRIMM'S FAIRY TALES
- 各卷繪入 總フリガナつき  
各册定價金貳拾錢 郵稅四錢宛

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 (番五五三京東座口金貯替振) 元版出



神學博士ジエムス・ストウカア原著

日高譯  
善一

# 使徒保羅

定價金四拾錢  
郵費金四錢

## 目次

- 第一章 歴史上に於けるパウロの地位
- 第二章 自ら期せざる事業に對するの準備
- 第三章 回心
- 第四章 パウロの福音
- 第五章 勞役者を俟てる事業
- 第六章 傳道旅行
- 第七章 著述並に品性
- 第八章 パウロ教團の描寫
- 第九章 激烈なる反對論
- 第十章 終焉

保羅は基督教上、基督に次いで最も重要な位置を占む。固より夫の十二使徒以上なり。其の元來英雄的資質に富み、而も基督敎攻撃の急先鋒より一轉じて基督の使徒となり、「最早われ生けるに非ず、邦人の傳道に努むる多年、白熱的信仰を以て一生を終れり。保羅の後に保羅無し」と謂ふべし。原著者ストウカア博士は「基督の姿」「基督傳及び本書等の著者として、夙に世に知らるる。本書に最も所的に暗示の光能く歴史の心髓を徹し、良師の好指針たるのみならず、又信仰の實をひするの書となすに足るなり。」

東京 東區 本町三丁目 電話 五三三番 日本協會出版

スウェーデン原 著 ルエウ本 田増次郎譯

# 小説 黒馬物語

第三版 定價金五拾錢 郵費六錢

大日本基督教會雜誌の批評

基督教會にては、此原著を頒布せんとし、既に三百萬部に及べりと云ふ

『黒馬物語』は「アラック・ビニョー」の翻譯であり、譯者は本田増次郎氏でございます。文章は快活に流暢に、また至極平易であつて、大人にも勿論面白く小供にも分ります。物語の成立は「アラック・ビニョー」といふ美しい黒馬の自叙傳で、農夫グレンの牧場生まれ、種々の運命に遭遇して流轉の間に或時はゴルドンといふ情け深い紳士の家に、或時は虚榮心に富んで居る伯爵夫人に、また或時は辻馬車屋に、紳士に夫人に、種々なる主人を持つて種々の勞役に従ひ、嬉しいことつらいこと種々の經驗を物語るものであります。趣味の間に教訓を寓し、教訓の間に趣味を交へて、四百頁に近い冊子がいつの間にか讀み終らるるのでございませぬ。そしてこれまで動物についてさほどの興味を持たせませんでした。私共でも、動物の境涯はこのやうなものかと切に同情の念を増し、一方には辻馬車屋ツェー、馬丁のジョン、騎士ゴルトンなどの主張や人格によつて、英國紳士の面影が充分に知られますゆゑ、少年少女には是非讀ませたい書物であると思ひます。

東京 東區 本町三丁目 電話 五三三番 日本協會出版



井口彌壽男著

# 演説講義演説教法

定價金貳拾錢  
郵稅貳錢

## 第一章 概説

第一 演説の必要  
第二 雄辯とは何ぞ  
第三 練習の必要

## 第二章 準備

第一 間接準備  
第二 直接準備

(一) 趣旨と演題 (二) 材料の蒐集  
(三) 演説の組織

(イ) 緒論 (ロ) 本論 (ハ) 結論

## 第三章 登壇

第一 草稿携帶の可否  
第二 姿勢  
第三 心構へ  
第四 言語  
第五 音聲

演説は往年政黨勃興時代に最も盛んであつたのが、中頃一たび衰へて、近時及び又漸く盛ならんとして居る。講演は年と共に之を必要とする範圍が廣まり、之を必要とする場合が多くなつて、今や都にも鄙にも頻りに其の會が開催される有様である。説教は昔から相變らず行はれて居る。要するに演説も講義も又説教も、世が文明に進むと共にますます行はれて來るの必然の理である。本書は著者が第一自己の経験に基き、其の上内外大家の説をも參酌して記述した新著であつて、一言一句と雖も皆讀者を悟らしむるものを有す。時勢の要求する書とは、實に本書の如きものを謂ふのであらう。

元版

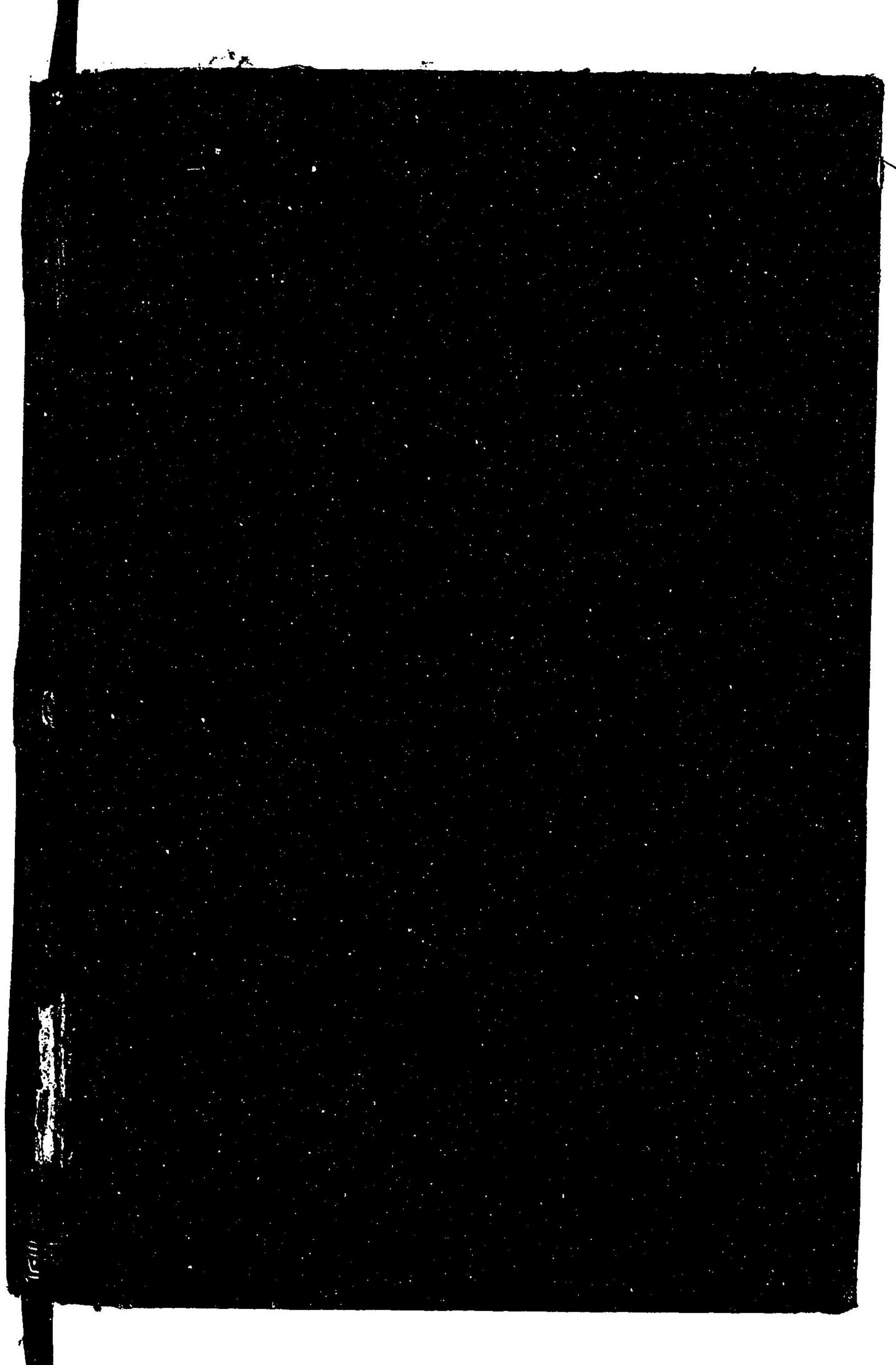
内版外協會

東京振興會  
東京座口  
上野三丁目  
駒込三丁目  
入船五丁目  
十二番五丁目  
地番五十五番



345  
750







020367-000-5

325-150

逆境の慰安

ジー・エイッチ・ナイト/著

M44

ABI-0174





